令和３年度
日本精神科医学会学術教育研修会
報　告

事務部門

伴　亨

令和３年度日本精神科医学会学術教育研修会事務部門は「変革期を乗り越える～課題と対策～」をテーマに，令和３年10月14日，和歌山県支部の担当でTKPガーデンシティ大阪梅田で約140名が参加し開催された。

開講式では和歌山県支部長の木下定子先生が開講のあいさつをされ，続いて日本精神科医学会の山崎學会長があいさつをされた。

最初の講演は「精神科医療の将来展望」と題して山崎學会長が講演された。精神保健行政の歴史を振り返り，治療法の開発経過，諸外国と日本の閉鎖処遇の考え方や精神病床の定義の違いなどをわかりやすく解説された。精神科に入院する認知症患者さんは増えていないことなどにも触れ，いろいろな情報に隠れているまやかしに惑わされないように，しっかりとした目を持つことが大切であると強調された。

引き続き，東京医科歯科大学の河原和夫名誉教授により「コロナ禍を乗り越えて―病院事務職の役割―」と題する講演が行われた。厚生省に勤務されていた頃に，国立病院の在り方について研究されており，また医療計画の中に精神疾患を加え５疾病５事業とした仕事にも携わった経験から，病床規制など国の規制の裏には何らかの政策が潜んでいることを忘れないようにすることが大切であり，患者確保のためには営業活動や広報も必要であると強調された。

午後の最初の講演は，医療接遇コミュニケーションコンサルタントで薬剤師である村尾孝子先生が「クレームを予防する病院職員の接遇・マナー」と題して講演された。患者さんは「病院に行けば治してもらえる」と信じて来院されていることを忘れず，思いやりの心が患者さんに見える形で伝わるような接遇のために，態度，表情，笑顔，言葉遣いの要点を教えていただいた。

続いて，公益社団法人日本医業経営コンサルタント協会理事の眞鍋一先生により「医療従事者の働き方改革における事務職員の役割について」と題する講演が行われた。病院は国家資格を持っている職員が多いため事務職員はその人たちの命令下になることが多いので，病院管理については事務職員が担っているという自覚と自負が必要であること，そのためには名前と職種を入れた組織図を作ることが重要とのお話があった。さらに，事務職員も医療用語を勉強することが大切で，この教育には３年かかるがぜひ必要との見解が示された。また災害時に出勤可能な職員を確認するシステムも必要であるなど，事務職員の重要性を強調された。

最後に作家で高野山本山布教師である僧侶の家田荘子先生により，「この世に生まれ，生きて，生かされて…～高野山開創・空海に学ぶ～」と題する講演が行われた。演者自身の経験やお遍路との出会いを通して，自然の中を歩き，自分を見つめる大切な時間ができること，歩くことが元気を呼んでくれることなど，人生を歩むことの深さを述べられた。

講演終了後，直ちに閉講式が行われた。感謝状

が木下定子和歌山県支部長に授与され，木下支部長が温かみあふれる閉講のあいさつを述べられ全日程が終了した。

今回は新型コロナウイルス感染症対策のためZoomウェビナーを用いたオンライン開催となったが，充実した内容で進行も滞りなく順調に行われた。和歌山県支部長の木下定子先生をはじめスタッフの皆様のご努力に深く感謝するとともに，お忙しい中ご発表をいただいた諸先生方に厚く御礼申し上げます。

（日本精神科医学会　学術教育推進制度
学術教育研修分科会）